

E U実務セミナー「旅行者へのもてなしの伝統」

日 時： 平成19年4月24日（火）

場 所： ひょうご国際プラザ 交流ホール

【パート1：講 演】

《 講 師 》 ラ・サピエンツァ大学(ローマ) 民族学

ルイジ・M・ロンバルディ・サトリアーニ正教授

皆様、本日は「旅行者へのもてなしの伝統、日本とイタリア、二国比較」E U実務セミナーにお越しいただき、誠にありがとうございます。

このセミナーの実施に当たって、関係者の方々、たくさんの方々に御協力していただきました。まず最初に、イタリア総領事館のステファノ・ザニーニ領事に厚く御礼申し上げたいと思います。そして、兵庫県国際交流協会の方々並びにイタリア観光局のマルティーニ所長、その方々にもお礼を申し上げたいと思います。そして、今日御出席の皆様方、長い時間になりますけれども、この機会、このセミナーに御出席いただきましたこと厚く御礼申し上げます。

そして、通訳とも既に先ほど打ち合わせをしましたので、皆様に私の講演を楽しんでいただけるかと思えます。

将来的に、私、日本語を少し勉強して、できれば皆さんと日本語で会話ができるようになりたいとは思いますが、今回は、まだ日本語をよく知らないということで、通訳を通じてのセミナーとなります。ときどき逐次通訳が入りますので、そこところは御了承願います。

そして、本日のテーマですけれども、「贈り物の習慣ともてなしの文化、南イタリア民族世界を中心に語る」というふうなタイトルになっております。一人一人の人生におけるさまざまな節目、そして社会生活に根差した行事の数々、そんな特別なときを彩ってくれるのが贈り物です。特定の文化的機能を果たす体系化された儀礼に習い、家族や地域社会での儀式に集う人々の間で交わされるのです。このような考察というものは、広く押しなべて言えば、どこの社会にも当てはめることができます。今回の講演では、数十年以上前から私が研究を続けております南イタリアの民族文化を中心に話ししていきたいと思えます。

さて、西洋の民族学者たちは、ライフサイクルという体系に沿って個人個人の人生に編み込まれている特定の民間伝承に秩序を与えてきました。誕生以来、こうしたライフサイクルの一つ一つの節目において、それぞれ特別な行事が催され、そのひとときをより一層印象深いものにすることが贈り物です。理想的な人生を歩んできた人ならば、だれしもが感じるところでしょう。

例えば、出産では母親と子供への贈り物、洗礼では両親から子供への贈り物、婚約では婚約者の間で交わされる贈り物、結婚では新郎新婦の間で交わされる贈り物のほかに、家族、親族、友人からカップルへの贈り物などがあります。また、成年祝日と誕生日には家族や親族、そして友人たちからの贈り物、葬儀では慣例で故人への贈り物をひつぎに入れます。硬貨やステッキ、そして子供

であったのならはおもちゃでしょう。そのほか、故人に由縁のある品々が使われます。これは故人のアイデンティティを顕示しようとする行為であり、死んでしまってもその人らしくあり続けられるようにとの願いが込められているのです。砂糖菓子のコンゼットや花嫁のベールなどがよい例でしょう。このような品々を受け取ることにより、故人は三途の川の船着き場で切符が買え、懐かしい品々に囲まれれば、黄泉の国の環境に早く慣れ親しむことができると考えられているのです。

年間サイクルで行われる伝統行事にも同じことが言えるでしょう。ちなみに、この年間サイクルという体系も、17世紀、そして18世紀の人類学者が愛用しました。

正月から謝肉祭までは、豚肉を親族や友人に配ります。

成人の祝日でも贈り物が登場する場合があります。例えば聖ヨゼフの祝日には、貧しい人たちへ施すレンズ豆を使った食事を用意します。

また、復活祭には祝福の卵、彩色された卵、そして最近はチョコレート製の卵も出回り、大量生産もなされています。

また、伝統的なお菓子も取りざたされます。例えば、カラブリア州のグッツッパといひます小麦と砂糖でつくるお菓子。または、今なお人気のある平和のシンボルのハトの形をしたパンケーキ、コロンバ、これも工場生産品がさまざまとあります。

また、収穫祭などでは特産品が振る舞われます。しかし、ここでは商魂が多かれ少なかれ透けて見える消費促進主義的な非礼と伝統的観光との融合が見受けられます。例えば、大々的なプロモーションを行う商品を無料配布するお祭りもあります。

そして、11月2日の万霊節には死者の霊が子供たちにお菓子やおもちゃをプレゼントするといひますが、実際には家族からの贈り物です。

さらに、クリスマスにもなれば食品の贈答が盛んになります。正餐には伝統にのっとった品数のクリスマス料理が用意されます。

以上、ここに列挙したすべての行事において、贈り物の送り主及び受取人の役割は非常に明確で、贈り物の文化的機能もはっきりとしています。文化的にお膳立てがなされた形で送り主は自分の真心を伝えようとする。そして、贈答の場面に登場する人々の間でお互いの絆を深めようとする。これが贈り物の文化的機能なのです。

パプアニューギニアのトロブリアント諸島では、住民の間でクラという贈り物の慣例があります。ブロンスラフ・カスペル・マリノフスキによる名著「西太平洋の遠洋航海者」では、この慣例を分析することにより、贈り物のこうした特徴を浮き彫りにしています。だからこそ、贈り物の慣例はアイデンティティと他者性の葛藤を緩和し、最良の解決策を与える豊かなもてなしの文化の一端をなすのです。

膨大な数の学術論文がこのテーマを主題としていることからわかりますように、アイデンティティとは自我を誇示していく上で欠かせないテーマなのです。人とは、みずからのさまざまな経

験、そして選択をつかさどる主体的存在であると感じなければならないからです。そして、自分の意のままにならないもの、ひいてはさまざまな形態、方法で回避されるべきものとは他者性の領域に属するのです。他者性の輪郭というのはぼやけがちで、正確かつ鮮明な肖像が描けない場合があります。自我が認識を迫られた人々に対し、持ち得る情報を組み合わせて描き出す輪郭こそが他者性となるからです。

歴史の中では、ありとあらゆるバリエーションでさまざまな他者像が次々と登場しました。日常的なレベルで言えば、大人にとっての子供は他者、男性にとっての女性も他者、そして生きているものにとっては故人も他者となります。

時代の流れの中では、とりわけ重要な意味合いを持つに至った他者のタイコロジーも幾つか出現しました。例えば、定住民にとっての遊牧民、同様に住民にとっての旅行者、イタリア人にとっての外国人、歓待する人々にとっての客人などが考えられます。

他者という存在を受け入れる社会の寛容さ、多種多様なもてなしの技、もてなすという行為の肯定的な含意などは、他者との出会いにはつきものの危険性を取り除こうという意図のあらわれなのです。だからこそ、出会いを何とか親しみやすい雰囲気盛上げ、あわよくば他者の正体を確かめようと既知の領域に引き込もうとするのです。

恐怖に彩られたかもしれない自己と他者の出会いがもてなしにより互いにとって教養を深め、そして成長する機会へと変容するのです。贈り物を用意し、交換し、そしてそれが流通すれば、人と人との絆は廃れることはありません。はぐくまれた絆はその姿を変え、やがて堅牢なものへと成長を遂げるのです。

想像上の他者像を展示する美術館のコレクションに加わるのは、ここまでで簡単に御説明さしあげた他者像のほか、次のような人々も上げられます。聖人、巡礼者、物乞い、外国人、移民、旅人、客人、そして観光客です。

民間宗教では、あまたの聖人たちについて事細かな逸話が語り継がれています。こうした聖人たちは、さまざまな町、都市において聖人が起こすと言われる奇跡にちなんだ方法で崇敬されているのです。特定の災いに対して奇跡的な効果を発する特殊能力というような奇跡を起こす力ですが、これは聖人が俗世に生きていたころの出来事と密接に関係しています。ですから、災いの種類によって専門の聖人を選ぶということです。苦しみや危険にさいなまれる状況では、人は奇跡を願って聖人という特定の存在にすがります。

そして、晴れて満願成就となれば、感謝の気持ちを込めて聖人に奉納品を捧げます。一般的な奉納品は彩色されたタブロー、これは日本の絵馬に似たものですが、このタブローに描かれているシーンとイイますのは、危険が迫った一場面と聖人がその様子を天の高みから見守る姿が描かれています。そして、PGRという文字が描かれております。これは恩恵に感謝を込めてという意味合いで、贈り物の意図を明確に示しているのです。

イタリア全土に点在する聖地では、その教会の壁などに無数の奉納品が飾られています。

イタリアの町、都市、田園地帯のありとあらゆる場所に存在する無数の神授の社的な教会では、ほぼ例外なく膨大な数に上る奉納品が保管されています。この奉納品の形態はさまざまで、奇跡的に回復した体の部分をかたどったもの、シルバー製のハート、写真、そしてそのほかありとあらゆる供物が信者からの謝意のあかしとして納められているのです。

何世紀も前から今日に至るまで、こうした信仰の地を目指してやってくる数多くの巡礼者が途絶えることはありません。彼らは奇跡を祈願するため、もしくは満願成就のお礼参りにこうした聖地を訪れるのです。厚い信仰心から住みなれた土地を離れ、巡礼の旅に出る人々は、聖域という媒体を通して神との直接的なコミュニケーションを試み、旅することによって精神的に大きな成長を遂げます。

巡礼者に非常に近い存在として上げられるのが物乞いをする人々です。彼らは通行人に対して呼びかけたり、聖地の近くに陣取ることにより、人々の同情を引き、施しを受けます。ここで登場する贈り物は憐憫の情のしるしであり、幾ばくかの博愛的な連帯感のあらわれでもあります。

外国人、移民、そして旅行者は皆よその土地からやってきます。ですから、非常に危険性が高いという側面がある一方で、先ほども既にお話しさしあげましたように、交流によってその出会いが活気や豊かさなどをもたらすということもあります。

このような人々を歓待し、寝泊まりさせ、贈り物を差し出すという行為は出会いの場ではよく目撃される光景です。これらの行為の意味するところとは、危険回避の一語に尽きます。安全で親しみの持てるみずからのテリトリーによそ者を誘い、彼らの潜在的な危険性を低減しようと試みるのです。また、よそ者が多くの観点から客人という存在になってしまうと、知らず知らずのうちに状況は一転します。古代文明以来、つまりギリシャ、ローマ文明以来です。客人という存在につきものの大いなる神聖性を帯びるのです。

このような現象は、膨大な数の旅行記が事細かに明らかにするところでもあります。欧州内外の国々からイタリアにやってきた旅人の体験談、日記、物語、書簡に描写される訪問誌はそれぞれ個性にあふれています。また、筆者にとって実り多き出会いや多彩な経験の数々も語られています。道中に培われるこうした経験は、18世紀、19世紀のヨーロッパにおいて紳士教育には欠かせない貴重な体験と考えられていたのです。

さて、今まで御説明さしあげたよその土地からやってくる人々の特色を残し、いわば彼らの歴史の後継者と言えるのが現在の観光客です。人それぞれの目的を胸に予定を組みつつ、旅がもたらしてくれるであろう感動に思いを馳せます。実際に旅をすとなれば、人類の至宝と考えられているような比類なき美しさを誇り、美術品の宝庫とされるような町の魅力が満喫できるプランを立てるのもよいでしょう。

例えば、数千年の歴史の重みを感じさせるローマ、芸術の都フィレンツェ、ラゲーナにたたずむ町並みの優美なベネチア、風光明媚なナポリ、ノルマンディー文化とアラブ文化の痕跡が蠱惑的なマレーノなどです。その土地ならではの歴史を彷彿とさせるようなモニュメントが数多く残る町が

まだまだたくさん存在します。観光客はそうした町を訪れることにより、何世紀もの歴史を誇る贈り物の文明が生み出したもてなしの世界を体験できるのです。

イタリアのさまざまな地域において地方色豊かな歴史が色濃く残り、多種多彩な建築物という形で目を楽しませてくれます。また、地元の人々の暮らし方、食習慣、祭事、宗教色の濃い慣例などが影響を及ぼす町の日常風景にしても、その土地ならではの個性に満ち満ちています。イタリアを旅するという事は、みずから進んで芸術的風景や郷土料理に触れ合い、親しみ、けんらん豪華な儀式や祭事を目撃することです。このような体験を通して、知的好奇心を満足させ、みずからの教養を高めることが可能になるのです。

特に、日本について申し上げますと、日本社会とその文化は今も昔も変わらず、イタリアにおいて憧憬的であります。これは日本独特の様式、様式美に惹かれてのことです。日本ならではの様式を通じて、日本文化はやがて豊かな儀礼性、独自の美意識、柔らかな立ち居振る舞いを生み出してきました。

さて、この物腰の柔らかさというのは脅威への服従ととらえてはなりません。あくまでも丁寧な物腰で脅威を穏便にかわそうとする所作の文明なのです。そう私は強く信じております。

ここでぜひ皆様に知っていただきたいことがあります。日本企業の代表者訪問はイタリアにおいて格別に喜ばれるという事実です。したがって、この2つの社会には数多くの類似点と共通点があるはずだと私は確信しているのです。例えば、近年日本映画、日本のファッション、さまざまな日本工芸品への関心などがますます高まってきているのも偶然ではないでしょう。

では、理想的な日本とイタリアの出会いとはどのようにすれば最高の形で実現できるのでしょうか。強い連帯感と仲間意識を喚起する、人類は1つの環境を共有し、だれしもがそこに帰属しているという意識、まさにこうした思想を両国で醸成させれば、この上もなくすばらしいたまものを授かることでしょう。

では、本日は私の講演を1つのエピソードで締めくくりたいと思います。

かのアインシュタイン博士がアメリカ入国の際、すべての旅行者と同じように質問用紙を受け取りました。属する民族を訪ねる項目に彼が記入した答えは「人」だったのです。この逸話が示唆するのは、倫理としての政治的視野の重要性です。暴力に満ちあふれ、凄惨な出来事の絶えない現在社会において、こうした視線の必要性が今痛感されます。

以上、御清聴どうもありがとうございました。

【パート2：対談】

《対談者》 ラ・サピエンツァ大学 ルイジ・サトリアーニ正教授

大阪外国語大学 森栗 茂一教授

森栗教授 さて、先生、本当にありがとうございました。

そう、南イタリアのお祭りのときに行きたいですね。ローマもいいけれども、先生のお生まれの南イタリアはとてもフレンドリーでいいですね。

皆さん、私、イタリア政府観光局の回し者でございます。この中にイタリア観光局の行事表が入っていますので、ぜひまた見てください。ただいまマルティーニ局長が、ありがとうございますと日本語で言っておられます。

さて、先生の観光の最大の目的は、アインシュタインが言ったように、お互いを知ることではないか、そしてそれぞれの違いを理解することで人類の豊かさを共有するという、大変観光は遊びではない重要なことで、私たちはほかの地域を知ることが物すごく重要なことだということがよくわかりました。

その上で、ちょっといろいろお伺いしたいのです。

まず1つは、イタリアに行かなければヨーロッパでは紳士になれない、これは日本人もですか。

サトリアーニ教授 答えはもちろんノーです。日本の方々はまだもう紳士、淑女でいらっしゃいます。

先ほどのヨーロッパでの紳士教育というお話が出ましたけれども、なぜイタリアに行かなければならなかったかと申しますと、まず最初にインテリ的な教養を身につけること、そしてまた美術的センスを身につけるといった意味合いでも、その紳士教育の仕上げという意味でイタリアに皆さん行かれていたわけですね。日本人の観光客、今イタリアにたくさん来ていただいておりますけれども、もっともっとたくさんの方々に来ていただきたいと思っております。

ジェンティル・ウォーモとイタリア語で申すんですけれども、優しさを持っている男性ということですが、日本の方々には既に優しい心を持っていらっしゃいます。ですから、そういったイタリアに来なければ紳士、淑女になれないということは全くございません。御心配なさらないようお願いいたします。

森栗教授 日本でも、一人前の人間になるとときには必ず伊勢に行かねばならない、これは皇室の先祖を祀っているところです。そのときに、実は日本ではお米の種を、シードをもらって帰りました。それで、日本の米文化はいい種があちこちに広がったのです。日本の贈り物にはこういう意味もあるのです。

そうしたときに、南イタリアの巡礼の文化ですが、それはイタリアのドメスティックなものなのか、それともヨーロッパの各地から来たのか、どうでしょうか。

サトリアーニ教授 もちろんこういった巡礼者というのはイタリアの各地からだけではありません。また、ほかの国からも数多くの巡礼者が来ました。その当時、昔は、サンティアゴ・デ・コンポステーラというスペインの方の聖地が一番クラシカルな聖地としてにぎわっていたわけですが、やはりイタリアもロケーション的にヨーロッパの中心に位置するというので、非常にアク

セスがよいということで、カトリック系の信者がたくさん押しかけたといった背景もございました。

そして、ヨーロッパ以外の国からもたくさんの巡礼者が来ておりました。こういった方々は宗教的な目的だけではなく、やはり文化的なものに触れたいといった、そういった思いからイタリアに来る方も非常に多かったと思います。

ですから、巡礼者、そして観光客、旅人、旅行をする人たち、この3つの存在というのにはそれぞれ共通項があると思いますけれども、細かいことを言えば少しずつ違うと思います。

森栗教授　そういう文化のあるところを訪れる巡礼というのはとても楽しいですね。日本にも、とてもすばらしい巡礼のプログラムがあります。ただし、日本の場合は日本人しか回っていない。ここが大変残念なところですね。私もぜひその巡礼に行ってみたいような気もします。

巡礼道というと、ヨーロッパではサンティアゴ街道がとても有名です。しかし、南イタリアにも、だれでもが行くところに行くんじゃないで、そういう南イタリアのみんなが行かないところに行ってみる。フレンドリーで受け入れてくれる。そこに行くのはとてもおもしろいことかもしれません。私のような者も少し紳士になれるかもしれません。どうでしょう。

サトリアーニ教授　もちろんというふうにお答えしたんですけど、だからといって森栗教授が紳士ではないと言っているわけじゃないので、そのところは御理解いただきたいと思います。

まず、私は日本文化を非常に愛しておりますし、非常にすばらしい文化だと思います。まず、何が私の興味を引くかといいますと、日本の人々の優しさですね。そして、日本の方々と一緒にいると本当に楽しいときが過ごせる、そういったことから日本文化はすばらしい文化だと思っております。ですから、今さら森栗先生がいらっしゃって、それでイタリアで何か学ぶということもないと思います、その優しさについては。しかしながら、イタリアにいらっしゃったら、やはり精神的にも非常に豊かなものに触れることができると思いますし、そして教養も身につけていただけるとは思います。

巡礼で一番大事なことは、コミュニケーションをとるということです。巡礼といいますと、まず最初に浮かぶのは、垂直的な、パーティカルな関係性ですね、それは人と神という関係性です。その人と神のコミュニケーションだけを図るのが巡礼ではありません。もっといえば、もっと重要なコミュニケーションというのは、巡礼者の間で生まれるホリゾンタルな、水平的な関係性、そういったものがもっと重要になるのです。その巡礼者の間でコミュニケーションがとられ、そして仲間意識といったものが芽生えることによって、私たちの間のコミュニティ、彼らのコミュニティ、巡礼者の間でのコミュニティというものが生まれます。まさしくこの水平的なこの関係性というものを生み出すための巡礼といった意味合いも私は重要視しています。

森栗教授　私もそう思いますね。神を通して、仏様でもいいんですね、人と人とのコミュニケー

ションがとりやすい、それがとても重要なことだと思います。

人は歩くことでほかの人と出会い、そしてコミュニケーションする。そのときに、例えば先ほど先生の話にあったハート型のシルバーだとか、人々の思いを込めた写真だとか、そういう人々の願い、魂に触れるということがとても重要なことではないかと思うのですが、つまり過去の人々の思いと触れたり、その地域の文化の中の人々の思いに触れたりできることがとても重要なことだと思います。

サトリアーニ教授 そうです、そしてこの巡礼とか旅をするということで非常に重要なのは、オープンな心で旅をすることということですね。

オープンといいますとどういった意味かといいますと、まずやはり普通人は家というもの、日常というもの、習慣性といったものに囲まれて過ごしているわけなんですけれども、旅をする、そして巡礼の旅に出るということになりますと、その日常的なものから抜け出して非日常的な世界へと旅立つことになります。全く知らない他の土地に行くということになります。そうなってしまえば、やはり今まで自分の家、そして習慣や仕事、そういったもろもろのものに縛られたというか、そのしがらみというものが一切払拭できるわけですね。そのしがらみがないからこそ、非常にオープンマインドな感覚で新しいものに触れるとといったことができる。それが旅の醍醐味ではないかと私は考えているわけです。

ですから、既知の世界から未知の世界に出ることによって、やはりほかの人に対しての思いやりというものが生まれてきます。旅での巡礼者、そして観光客もそうですけれども、旅することによって人々との出会いが生まれ、そして既成概念が打ち破られます。

そういった観点からしても、私はこの心、そして政治的な開放性を促す旅というものが非常に重要だと思っています。そして、その非常にオープンマインドで新しい世界、新しい人々に接することには深い感動を及ぼし、そして新しい知識を身につけ、教養を深めるといったことにもなりますでしょう。

森栗教授 そうですね。そのオープンマインドで行くときに、一定の巡礼の様式があることが私は大切だと思います。イタリアの巡礼には共通のユニフォームのようなものとか、何だか共通の持ち物とか、そういうのはあるんでしょうか。サンティアゴ街道だったら、シェルの何かをつけていますよね。

サトリアーニ教授 先ほど先生からお話しいただきました貝ですけども、イコノグラフィー的な意味合いがあります。これは中世からのこういった習慣があったわけですね。それから、貝もありますけど、杖を持つといったこともあります。見た目の共通点というのが巡礼者の中では見られるし、こういった杖を持っているとか貝を持っているとかといった、そういった特徴があるという

わけです。

ですけれども、何か特別な衣装があって、それを特に身につけて回るといったことはありません。例えば、やはり一番巡礼者の特徴的なものといいますと、ルックスではなくて心持ちですね。

だから、あえて衣装についてお話をさしあげますと、サン・フランチェスカ・リ・パウラという聖人の方がいらっしゃるんですけど、その方のような格好をして、あえて巡礼に行くといった方々もいます。しかし、こういった方々は、いわゆる巡礼者というよりも、もっとワンステップ上に上がった聖職者に近いような方々、非常に信仰心の厚い方々ですね。こういった方々があえて聖人のような格好をして回るといったこともありますけど、これはかなり例外的なお話だと言っていいでしょう。

やはりイタリアでは、巡礼者の着る服というものはないんですけども、一番何か共通点があるとすれば、やはりメンタリティーですね、巡礼者としてのメンタリティー、それは皆さん共通するところがあると思います。

森栗教授 日本にも四国遍路というとても有名な巡礼があります。それは共通のユニフォームを持っているからもてなしがしやすいのです。実は、惜しいことに兵庫県には四国遍路がありません。でも、とてももてなしの深い地域なのです。私はそれがとても残念に思う。

かつて、日本の宗教者、例えば伊勢神社、伊勢の神官などはツーリスリト・ビューローです。一定の宗教の様式で人々をツーリズムに誘ってきたのです。私は、現代においては伝統的なものを生かしながらきちとした様式をつくるのが恐らくツーリズムと巡礼との間をつなぐものではないかと考えるのですが、これは余りにも現実的でしょうか。

サトリアーニ教授 そうですね、やはり重要なのは交流するといった行為でしょう。人々が交流することによって生まれるプラス効果というものが私は重要だと思っております。ですから、先生が今おっしゃったように、信仰心の厚い人だけがそういった巡礼をするのではなくて、もっと観光の意味合いもあったような巡礼というのがもっともっと盛んになっても私はいいと思っております。

そして、この巡礼ですけれども、巡礼だけにかかわらず、その旅をすることというのは人類との出会いでもあります。そして、旅人がさまざまところに行くということで経済的効果も生まれてきます。もちろん経済的効果だけをねらってそういったツーリズムというものを前面に押し出していきますと、必ず目的は果たせません。エコノミーというのは、あえてやはりそのツーリズムの中の一面としてとらえるべきです。

そして、この社会の中で、先ほど私講演の中でも申し上げましたけれども、人類は一つである、人々は人であるということ、みんな一緒なんだという共通認識を持つということが非常に重要だと思います。こういった意識を持てるようになるには、やはり旅をすること、そしてさまざまな社会の人々と出会い、そして知り合うといったことが非常に重要だと思います。たとえ地理的に非常に

離れた国の人とでも、こういった認識を持って接すれば必ず何らかの相互理解というものがあるはずで

ずです。そして、サン・ジャコモという巡礼の聖地の道があったわけなんですけれども、ここも非常に栄えたところとして、巡礼者が立ち寄るといことでさまざまな宿もたくさん建ちましたし、そしてお店の方々も商売繁盛ということで、その街道沿いに住んでいる方々が非常に潤ったという話もあります。

ここで注目していただきたいのは、この経済効果の裏には神聖性というもの、宗教というものがあ

ったということです。宗教からこういった経済効果が生まれるといった、こういった観点も重要だと私は思っております。他人と会うとき、そして交流を図るとき、間違っても他人を利用しようとか道具として使おうとか、そういったことをしてはいけません。やはり何かをするときには、お互いのために何らかの利益になるような、そういった心持ちで互いに接しなければいけないのです。もちろん何か自分のことを犠牲にしてまでだれかに尽くそうとかおもてなしをしてくださいという話ではないのです。互いのために何かをすることによって、新しい出会いが非常に実り多きものになるのです。これは心理面でもそうですし、そして知識も非常に深まりますし、そして精神的にもお互いに成長するでしょう。

森栗教授 でも、イージーなアクセスのためには、やっぱり私は様式が大切、本当に信仰しなくてもユニフォームを着るとか、そういう様式があった方がいいと思うんです。

じゃあ、日本のシステムをちょっと御紹介いたしましょう。

(以降は、プロジェクターによって映された画像を見ながら)

森栗教授 先ほど宿の話が出ましたね。これは一夜の宿をプレゼントする、そういう場所です。

これ、弘法大師、こういうプログラムをつくった人、プログラム・オフィサー。

日本語のもてなし、これは現在にこういう泊まる小屋をつくった人がいます。

これがユニフォームです。こういう人が動いています。私もやっている。

雨が降ってきました、大変です。そうすると、こういうシェルターがある。そういう場所、スペースを提供する、こういうプレゼントもある。

またこういう人がいる。これはバスターミナルですが、それがこういうふうなシェルターになっている。

そう、道がわからなくなると、こういうガイドが出て、そしてそこには、これからが一番苦しい、頑張ろう、そういう語りかけがあります。

旅人がストレッチ、実は私と一緒に暮らしている人です。語りかけのもてなし、こういう話も出てくるかもしれません。

道を歩いていると、おばあさんが巡礼をする人に、ミカンを食べて行きなさいとミカンを3つくれました。南イタリアも柑橘類が豊かなところですよ。そういうところがもてなしの気持ちがあるのかもしれない。

これは四国といって日本の暖かい島、サルデーニャの、シチリアかな、そんな感じのところですよ。

先生、またこのユニフォームが出てきました。声を掛けやすいですね。

ここは、ハッサクをどうぞ、この柑橘類を水の中に入れて、どうぞとしています。さらに、ここには花を活けています。そういう心配りの景観、ランドスケープ、とてもきれいですね。

まだある。橋を渡ると、お茶をどうぞと勧めてくれます。そういうお茶のもてなしというものは日本では重要なことです。こういう格好をしていると勧めてくれます。私も歩いていると、このようにお茶をいただきまして、羊羹が出てきます。無料ですよ。

こういう仏様のカードを集めていきます。そして、こんなふうには張って行って、軸にするのですね。

私のドクターペーパーを見てくれた先生は、自分が病気になるのに一生懸命診てくれました。その先生にプレゼントするために私は四国を回りました。願いがあります。道端には、おもしろいことにこんな小さな人形をプレゼンテーションして笑っています。

こういう柔らかな表情のもてなしというのもとても重要なことです。

以上ですが、きっと南イタリアのすばらしいもてなしは、こういうもてなしの文化を持っている日本人たちがいると、もっとわかるところがたくさんあるのかもしれないね。

サトリアーニ教授　そうですね、日本とイタリア、そのおもてなしの心というものは非常に共通点があると思います。もちろん歴史も違いますし、宗教も全く違いますけれども、何かその共通点、根底にあるものというのは非常に似通ったものがあると思います。聖なるものにオープンな心で接するというのがイタリアと日本の共通点ではないでしょうか。

イタリアに行きますと、2つのタイコロジーの地域というものがあります。都市、そして田舎ですね、全然違います。イタリアの都市部、産業が非常に盛んな商業の町といったところでは、全く人々の対応も違いますし、また農耕文化がまだまだ非常に根強く残っているようなところ、アルカイックな精神をまだいまだに持ち続けているような、そういった田舎に行きますと、また全く違う精神性といったものを持ってもてなす、そういった傾向が見られます。

いろいろな旅を皆さんするとは思いますが、重要なのはさまざまのところに行ってその土地のものに触れるということ、さまざまなものを経験するということが非常に重要だと思います。それはどんな宗教に属していてもそれは関係のないことです。神道でもいいですし、仏教でもいいですよ。

私はクリスチャンとして、今ちょっと福音書の話引用したいと思います。

キリストがある日非常におなかをすかせていたので、おなかがすいたと言うと、ある男が食べ物

をくれました。そしてまた、のどが渴いたと言いましたら、水をくれた。そのときキリストは何と言ったかといいますと、あなたが私にこういった行為をしたということは非常に素晴らしいことで、そして今後あなたも何かよいことをほかの人にしたというときは、キリスト、私に対してやったことと一緒にんだよというふうな話をしたというふうに福音書に書かれております。

これは非常に精神性というものがおもてなしの心に深くかかわっているといったエピソードだと思います。私の講演の中でも少しお話しあげたんですけれども、他者、よそ者という存在ですね、そういったほかの人たち、第三者に対して我々は神という存在をかいま見るのです。ですから、ほかの人々に何か施しをする、そしておもてなしをするという行為は、翻っては神に仕える、神に感謝するという気持ちにつながってくるわけです。

森栗教授 そう思います。

そして、先生、昨日東京でも話をしたけれども、先生のオープンな心にとても私は感動しています。いろんな経験をするのが大切です。ここは私のホームタウンです。ぜひ先ほどの四国遍路のユニフォームの体験をしていただけませんかでしょうか。ごめんなさいね。

私がこちらを回ったときに、あ、そう、忘れたらいかん。イタリアでも杖を持つけれども、日本でも杖を持ちます。

(サトリアーニ教授、四国遍路の巡礼衣装(笈摺)を着られる)

サトリアーニ教授 大変ありがたく思っております。今回こういった格好をさせていただいて先生と対談をさせていただいたこと、我々の出会いが象徴的な思い出として私は残ると思います。そして、皆様とともにこういったセミナーでお目にかかれたことも、これも非常に素晴らしい体験になりました。私はまさに日本のおもてなしの心に接したと今思っております。大変感動しました。

森栗教授 おもてなしを強要して、ちょっと大変申しわけない。

サトリアーニ教授 森栗教授、ありがとうございました。通訳の方にもお礼申し上げたいと思います。本当に皆さんどうもありがとうございました。

【質疑応答】

質問者

30年ぐらい前になりますが、イタリア自動車メーカーのイノチェンティとフィアットのエンジニアマネジャーと仕事をする機会がありました。ドイツ、フランスもそうでしょうが、イタリアも日本に比べて複合的社会だと思います。さまざまな民族が共生している社会という意味です。

それで、そのプロフェッサーのお話の中で、南イタリアはローマ・プラス・アラブという話がありました。そういうイタリアの、南部がそうなのでしょうが、南部に限らず、イタリアの社会の特徴である多様な気質から、そこから来る特徴、日本の社会と比べての多様ながゆえに異なる特徴を何かお示しいただければと思います。日本の社会もだんだん多様化社会になるだろうと、こう思いますので。

サトリアーニ教授 ありがとうございます。非常に高度な質問をいただいたものですから、この御質問に対して完璧な答えをこの短い時間ですることは非常に難しいと思いますけれども、できるだけ簡潔にお話しあげたいと思います。

我々人類学者、民族学者にとって、その・・・非常に多種的ではない1つの統一された社会、そういったシンプルな社会というものはないんですね。一見そういうふうにシンプルで単一国民であるような社会でも、実はよく研究してみれば非常に複雑でさまざまな人生、そしてさまざまな生き方ですね。そして、さまざまな存在の仕方、さまざまな生活の仕方というものが地域によって違ったりする、そういった事柄があります。

先ほど御指摘いただきましたように、イタリアという国、非常にマルチ・エスニックな国です。そして、もともとそういうふうに複雑なところであったわけですから、最近のテクノロジーの発展であるとか、そして今移民の方々がたくさんふえてきております。そういった方々が入ってきたことによって、さらに複雑度を増してきていると思います。ですから、イタリアは決してシンプルな1つの単一民族的な国家とは言えないでしょう。

ですから、文化もそれに準じて非常に複雑なものになってきます。文化が複雑になるといった背景には、必ずどういった人々がそこに住んだかということが重要になってくるわけです。

イタリアは古い時代からアラブや、そしてスペインの文化の影響というものを非常に強く受けてきました。ですから、やはりイタリアは多民族国家であると思いますし、今人種もイタリア人だけではなく、ヨーロッパ人だけでもありません。非ヨーロッパの国からもたくさんの方々が来て、そして定住しております。ですから、儀礼、そして習慣も全く違うし、もてなしの仕方も違う。さまざまなバラエティーに富んだ国になってきていると思います。

そして、私、日本についての個人的な意見を述べさせていただきたいと思います。ここで日本製が何かとか、そういったお話をするのは皆様方に対しても大変失礼なことになるので、あくまでも私の意見として述べさせていただきます。

日本の国、そして社会ですけれども、一見非常に単一民族でどこも同じような生活がなされているのではないかとこのように考えがちですけれども、実はそうなのか、私も考えてみました。日本といいますと、非常に伝統を大切にする、そして歴史というものを大切にしている国だと私は考えております。先ほど森栗先生がお話しなさいましたように、巡礼のお話を聞いていても、そういった国民性というものを強く感じました。そして、おもてなしの心というものも日本の文化に根づいた非

常にすばらしい伝統だと思っております。そして、天皇家への敬意といったものも日本国民の非常に大きな特徴ではないでしょうか。この歴史、そして古いものに対する畏敬の念というもの、これは日本人の非常にすばらしい点だと、美点だと私は考えております。

今、歴史的なもの、伝統に日本人は非常に執着を持っているというお話をしましたけれども、一方では非常に新しいものを取り入れるといった側面もあると思います。例えば、建築物ですけれども、どんどんと建てかえられますね。町の様相がどんどん変わっていくというのも、これはほかの都市、国には余りないような傾向だと思えます。私、なぜこういった現象が起こるかと考えて見ましたところ、やはり日本の皆様は過去も大切にすけど、未来も大切にす、そういった国民だと思えます。この一見矛盾するような未来を見つめる視線と過去への視線、この2つの視線が同時に日本人の中に内在しているわけですね。

神戸がその象徴だと私は考えております。神戸という町は大きな震災があって、その後見事に現在の形に復興いたしました。これは神戸の方々が見据える、未来に希望を抱く、そういった心持ちで生きていらっしゃるからこそここまで町が復興したのだと私は考えているんです。しかしながらも、神戸の方々、未来だけを見たのではなくて、やはり過去にも、伝統にもしっかりと注意しながら、こういった復興がなされたと私は考えているわけです。

矛盾するような未来への視点と、そして過去への視点ですけれども、これはまさに日本国民特有の複雑性の象徴だと思えます。これはおもてなしの仕方にしても町によって大分違うといったことから言えることではないでしょうか。

森栗教授 なければ私が。

皆さん、済みません。どうしても先生の今の話を聞いて、一言言いたかったのです。

日本もとても多様です。日本に来て、東京と奈良、京都をご覧になるだけではもったいないのです。兵庫県は、兵庫県の中にさまざまな文化があります。島もあれば、山の中もあるし、近代的な都市もあるし、世界遺産になるお城もあるし、温泉もある。ぜひ次回はツアーの、明日はうちの家に来ていただくんですが、奈良、京都へ行かれるそうで、大変惜しい。ぜひ次回は兵庫県に来ていただけますように。そのときは、兵庫E U協会に連絡をしていただければ、ガイドとして森栗がまいります。兵庫県知事になりかわってお願いいたします。

サトリアーニ教授 教授、まことにありがとうございます。先生が今おっしゃっていただいた言葉、まさにもてなしの心だと私は思いました。やはり心が通じることによって、互いの複雑な部分、奥に潜んだ部分というのも徐々に浮き上がってくると思います。そういった出会いを通じて、やはり友情というものが生まれてくるんだと思います。

森栗教授 私、兵庫ツーリズム協会のメンバーです。ミスター・もてなしと呼んでください。